

## ■追悼文

### 追悼 河合正之先生

濱 広幸（東北大学）



東北大学電子光物理学研究センター・理学研究科物理学専攻准教授河合正之先生が亡くなられたのは2012年6月25日のことです。震災以降の長期にわたる復旧活動で体調を崩され、1週間ほど仙台赤十字病院に入院されておられました。お疲れの様子ではありましたが、ベッドから加速器構成機器の納入業者へ電話で指図したり、研究室の者にインターネット接続のための通信SIMを病院に持って来てくれなどと、しばらくの静養後は以前のように現場復帰されるものと誰もが思っていました。

突然、先生の昏睡の報せを受け、何が起きたんだ、いったい、と私は大変狼狽した記憶があります。予期せぬ脳内出血のためでした。私が病室に入った時、河合先生は少し辛そうに眉をよせて、大きないびきで寝ておられました。回復を祈りながら待合室に居た私を主治医が呼びに来たのは、それから3時間後のことでした。お仕事で仙台を離れておられた奥様と神奈川で暮らしておられたご子息は残念ながら間に合いませんでした。

河合正之先生が東北大に来られたのは2004年のことでした。河合先生は当時、川崎重工業株式会社から東京理科大学の赤外自由電子レーザー研究センターに出向されており、河合先生の陣頭指揮により故黒田晴雄先生（東京大学名誉教授）とともに40 MeV線形加速器と中赤外自由電子レーザーの立ち上げを終えて利用実験へ邁進しておられました。河合先生は、黒田晴雄先生とご一緒に働かれておられた頃は本当に生き生きしておりました。黒田先生が体調を崩され一線を退かれてからは、河合先生は赤外自由電子レーザー研究センターを中心となって運営されておりましたが、残念なことは重なるものでしょうか、川崎重工は加速器産業から撤退することになっていました。

河合先生の研究生活のスタートは東海大学でした。大学の仕事を終えた夕方から、あるいは週末に和光の理化学研究所に通い、電子源を駆け出し研究者として熱心に勉強していたと聞いています。その後電子技術総合研究所（電総研、現産業技術総合研究所）の冨増多喜夫先生に誘われ、川崎重工から出向という形で自由電子レーザーの研究に関われるようになりました。しばらく後には大阪大学の三間罔興先生（当時レーザー核融合研究センター教授）のご指導で博士の学位を取得され、ますます自由電子レーザーや電子からの放射の研究に活躍されるようになりました。冨増先生とのお仕事は長く続き、佐賀九州シンクロトロン光研究センターの建設にも河合先生は尽力をつくされました。

電総研で建設された世界初の自由電子レーザー専用電子蓄積リングNIJI-IVも河合先生の手によるもので、蓄積リング自由電子レーザーの分野で多くの画期的な成果を上げられました。この頃河合先生とご一緒に仕事をされていた山崎鉄夫先生（京都大学名誉教授）も、残念なことに2011年11月に亡くなられました。

川崎重工が加速器から撤退することを聞いた私は、当時の東北大学原子核理学研究施設（核理研）の助教授として河合先生を迎え入れたいと、強く考えました。河合先生の経験は必ず核理研を再生

してくれる,と信じた上でのことです。2003年秋、河合先生を説得に理科大自由電子レーザー研究センターに赴きました。河合先生は愛車のアリストに私を乗せてイタリア料理店に向かい、昼飯をおごってくれた事を昨日の事のように覚えています。

仙台に来られた河合先生は、核理研の古ぼけた加速器に驚きながらも、合理的な運転を行なえるように様々な改良を加え、勘に頼らない科学的なビーム制御を実現していってくれました。また長期間にわたる原子核物理の実験中には朝の4時や5時にマシンの調子を見にやって来られ、実験グループに気合いを入れられておりました。

君たちは世界を担って行くんだから物怖じしてはだめだよ、とご自身も好きな高級イタリア料理店に、研究室の大学院生を時々夕食に誘っていました。そんな時は、美味しそうに料理を平らげる

学生を見ながら、ワインをゆっくり飲んでおられたそうです。

こんなに早く河合先生との別れがやってくるとは、夢にも思いませんでした。2011年3月11日の大地震から、私たちは一生懸命核理研の復旧に務めて来ました。河合先生は施設の改修や実験室の整備の陣頭指揮に立って私たちを鼓舞しました。自ら設計した新しいビーム輸送路を設置したのは亡くなる直前の事でした。これから新しい希望を満載したビームが加速される、という時のことでした。ふと、地震と津波は河合先生までも攫っていったかと思うことがあります。今もなお、どうにも涙が止まらないのですが、河合さんと一緒のつもりで河合さんが大好きだったイタリアワインを飲んでいます。ご冥福をお祈り致します。

合掌